しあわせ

9　月　号

おれはな
いつ死んでもええで
せやけどな
いつまで生きとってもええで
（利井明弘）

「手を合わす母」

年々厳しくなる猛暑の夏を超え、秋への入り口九月を迎えた。暑さ寒さも彼岸まで。朝夕は少しずつ秋の気配を感じるようになる。

慣れれば手ですることを足でするようになるというが、コロナへの警戒感も薄れ過去最大の高い波を作って拡大する第七波。

まさかこれから永遠に高い波が、寄せては返すことを繰り返すのではないだろう？

そんな心配はさておき、今、頂いているわが命、そして今日という日を先ずは合掌して頂く心の醸成を促してくださる仏縁・お彼岸を迎えた。

お彼岸とは、彼の岸・おさとりの世界への、人生にとって大切な仏事である。いただいた貴重なわが命を喜べているかを問い直す仏縁である。無限の過去と無限の広がり大宇宙の中に今、私が存在し生きている、生かされているという不思議。

この不思議を「有難し」と頷ける私になれよと催促されている。

法座案内

＜秋期彼岸・永代経法要＞
九月　二十七日（火）　昼席・夜席
　　二十八日（水）　昼席
講師　日置　宗明師
（四日市市　信明寺住職）

＜法味の会＞
九月　九日　午前十時～
お話　自坊住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二-四八二三

もうご往生されて二十年近くになりまが、わたしの恩師の一人である利井明弘先生は、まさしく仏法をみずからが生きることによって示してくださった、そういう先生でした。とつとつと言葉を置かれる先生のご法話は、けっして器用とはいえませんでしたが、どのような巧みな弁舌よりも雄弁に、仏さまのみ教えを伝えくださったことを、今も思い起こします。ただし、少々やんちゃな方であった先生は、わたしの目から見ても、ご家族は、大変だろうな、とは感じていました。

そんな先生のやんちゃエピソードの一つですが、先生が晩年に心臓のバイパス手術をされた時のことです。術後のリハビリで入院中、看護師さんにこう褒められたそうです。

「なんやかんや言っても、利井さんは、お寺さんですねえ、やっぱり違います。」

先生が病室でお香を焚いておられたことが、看護師さんの中で話題になっていたそうです。ところが数日後、一転、先生はかなりきびしく叱られることになりました。

「利井さん、あなた、病室でお香焚いているとき、まさかタバコ、吸ってませんか！」

これは、さすがに擁護する余地のない所業です。よりによって心臓のバイパス手術の直後ですから、やんちゃにも程がありますね。

そんな先生でしたので、ご在世中は口ぐせのように「おれはな、いつ死んでもええで」と仰っていました。死ぬのは怖くないという方はたまにおられるのでとくに印象に残ってはいませんでしたが、ご往生されたあと、ご家族にうかがうと、この口ぐせには家族は困惑されていたそうです。ただ、家のなかでは、その逆も言っておられたというのです。

「おれはな、いつ死んでもええで。
せやけどな、いつまで生きとってもええで。」

その切りかえしに、わたしは先生ともう一度出遇い直させていただいた思いがしました。

いのちとは生れて死んでいくもの。であるならば、生も死も平等にいのちの姿であるはずです。しかし、私たちはあまりに身勝手に、いのちを考えているのでしょう。生れてきたことに賛歌を送りつつ、死から目を伏せるわたしたち。死にとらわれて、生れてきたことの意味を否定しようとするわたしたち。しかし、生にとらわれて死を拒絶するのも、死にとらわれて生を拒絶するのも、いのちを受け入れられない私のすがたにほかなりません。

おれはな　いつ死んでもええで
せやけどな　いつまで生きとってもええで

仏法とは、生死をつらぬくいのちの意味を、仏さまの仰せにたまわる道です。思い通りにならない人生であるけれども、お恥ずかしい生き様であるけれども、その言葉を仰ぐとき、語りつくせないほど豊かな意味が、この身に与えられていく。死によってすら行きづまることのない、いのちの物語が拓かれていく。家族をやや困惑させたという、やんちゃな口ぐせでしたが、そこには、ただ仏さまの仰せを生きておられた先生の姿がありました。

そういえば、今年の七夕でしたが、長女がこんな願いごとを短冊に書いていました。

「かぞくみんなが、いのちをだいじにして、
なくなっても、ほとけさまになって、
いつまでも、みまもってくれますように。」

生まれたものは、死んでいかねばなりません。出会ったかぎり、別れていかねばなりません。けれども、仏さまの仰せのなかには、命の終りはあっても、むなしい亡びは存在しません。ともにお念仏いただきましょう。お浄土に生まれ、仏にならせていただくいのちを、歩ませていただきましょう。生きているかぎりいのちをだいじに、なくなっても、いつまでも。そう言い切らせてくださる仏さまの仰せが、ここに届いてくださっているのですから。